



第131号

親 諭

はじめに、令和四年十一月二日から八日まで厳修されました不断念佛相続十九萬日大法会は、本宗各ご寺院の住職、教師の皆様そして檀信徒各位の真盛上人に對する深い敬仰の念と懇篤なる愛山護法の志によって無事成満したことに對し心からお礼と感謝を申し上げます。

さて、佛の教えに「三法印」と言われるものがあり、その第一のものが諸行無常であります。それは「すべてのものは移ろう」といふものでもそれが生じたものである限り、必ず消滅していく」といふ真理です。

そしてその無常の真理を常に深く観じておられたのが宗祖真盛上人であり、その往生伝記の中で、上人が奈良の僧から追覽された墨一挺を受け取られなかつたという逸話が書かれています。

ここでは、そのように上人が無用の欲を離れておられたのは、「歩々に有待の命を危しむ、念々に無常の親を凝らしたもう」といふ諸行無常の真理を体得しておられたからである、と説かれています。

ここで有待の命とは衣食住などの助けによつてはじめて保たれている私たちの命を意味し、それを危しむとはその命のほかなさを感じるということなのです。

そしてこのほかなさすべてのもつては移ろうという無常を観じると、人はそれによつて、自己は流動的なものであつて、固定的なものではない、自己は縁起がもたらす関係性の中にあることを自覚できるようにするのです。

それが伝教大師の「己を忘れる」といふお言葉の意味であり、真盛上人の「この身を捨てる」と表された趣旨であります。私たちはこの無常親を深め、我見を滅ぼし、我執を断ずることによつて、無用の欲をとどめ、真盛上人のご遺訓である無欲清浄の教えを謹んでいきましょう。

あわせてこの無常を深く観じることによつて、今生かかされている有待の命の尊さと有難さに思い至り、常に「南無阿彌陀佛」と称えて感謝と喜びの日々を過ごしていきたいものです。

令和六年一月

管長大僧正 真惠

以慈修身



天台真盛宗管長 武田 圓龍

新年あけましておめでどうございます。今年も皆様にとつてよいお年でありますようお祈り申し上げます。

さて、表題の言葉は「妙法蓮華經」といふお経に出てくるものであり、身心に慈愛が満ちているという意味ですが、同時に、慈悲の心を持つことが他者に幸せを与え、自らの幸福感をも高めることになる、という含意もあると思います。

それでは慈悲の心はどうしたら持てるのでしょうか。

一つには、自分をも含めて、一切の人間は生まれながらにして不完全なものだ、と謙虚に思うことです。ともすると、私たちはいつも、相手の不完全さを追求し、自己の不完全さに気づかず、自己の正しさを主張します。しかし、聖徳太子は十七条憲法において「人はそれぞれに違ふのだから、自分が正しいと思つても、相手はそう思わないこともあるし、逆に相手が正しいと思つても自分はそう思わないこともあるだろう、我々はみんな凡人なのだ。」とされています。

二つには、自分の命は、この世のすべてのものとの関係性の中で生かされていると自覚することです。ですから、それは自分にとつて敵と思われるものについても同じです。たとえば、高野山の奥の院にはシロアリの供養塔があるそうです。シロアリは人間社会にとつては家屋を壊してしまうなどの脅威の昆虫ですが、他方では、三億年も前から地球上に存在し、あらゆるものを分解する生物であり、自然界にとつてはなくてはならないものでもあるようです。したがって、一見したところ害虫でしかないと思つても、深く考えれば、それが自己の命とつながっているのだ、と思ひ、供養されているようです。私たちは、これらのことを思い、無我の心を深め、念佛を称えることによつて、慈悲の心を高め、自他ともに至福の日々を送りたいものです。

結縁灌頂会への参加

福井教区 西楽寺檀徒 駒野傳一郎・伊都美

「結縁灌頂は、一生に一度は受けたくていいぞ」と、ずっと昔に聞いた覚えがある。そう教えてくれた父母も亡くなって久しい。その結縁灌頂会が今年行われると聞いた。コロナの影響もあり、今回は日帰り開催との事。参加しやすい条件だ。行ける時に参加しよう。父母が結んだ仏縁を自分達も授かるうと思いい、夫婦で参加することにした。

令和五年十月十六日、金木犀の香り漂う秋の日にご本山西教寺に参詣した。最初におよその日程や内容の説明があつたが、分からないことが多かった。やはり密教の奥義ゆえ、詳しく話してもらえないのだなと感じた。

続いて「説戒」についての研修があつた。悪を避ける事、良い行いをする事、人のために尽くす事、の三つの戒についての話だった。その後、聖水を汲む行事や、祖殿で三摩耶戒の儀式を受けた。そしていよいよ結縁灌頂の時。前回までは夜半に暗闇の中で行われていたという。歴史と伝統に彩られた行事はどんなものなのかと期待が膨らんだ。

果たして結縁灌頂は、不思議さに包まれた空間と時間の中にあつた。終わってみると時間の長さも分からない。秘密の奥義らしく、全く想像を超える現実離れた夢のような有り難い体験だった。そしてその中で、ある仏様とご縁を持つことができた。

私は、この尊く有り難い儀式に参加し、身体も精神も浄められたように感じた。これを機に自身の心を清らかに保ち、自身の行いが戒に背かないように日々精進したい。朝夕「南無阿弥陀仏」の念仏も忘れずにとなえたい。

この結縁灌頂会への参加は、生涯にただ一度と制限がある訳でなく、再びの参加も許されると伺った。それならば、次回には檀家の皆様やお講のお仲間にも声をかけ、また是非参加させてもらおう。すぐにそう思った。それ程有り難く嬉しく思える体験だった。

末尾ながら、この儀式への準備や運営、進行に関わって下さった管長殿下をはじめとする本山関係の皆様や各寺のご住職に心よりお礼を申し上げます。有り難うございました。

結縁灌頂会に入壇して

伊賀教区 西盛寺檀徒 山口 恭子

今年には四年に一度の結縁灌頂会が本山にて開催されると住職からお話があり、特に今回は住職と徒弟(息子さん)も我々と一緒に修行を受け、その一部を拝見することが出来るまたとない貴重な機会とお聞きし、入壇させていただけようと思いました。

去る十月十六日、秋晴れの暖かい日差しの中、橋本寺、西福寺、西盛寺の十七名がバス一台で西教寺へと向かいました。到着後、研修道場で進行役の方から、結縁灌頂会について説明を受けました。「結縁」とは、曼荼羅に描かれている仏さまと縁を結んでいただくこと。「灌頂」とは、頂(頭のてっぺん)に香水を注ぐ入門の儀礼です。その後、教学部長さまの講和後、修行が始まりました。始めに、本堂の縁から修法に使用する浄水を取りに行く取水の儀式を見せていただきました。受者の孫さんが通られるとき、祖母の方が涙ぐんでおられ、私も心を打たれました。昼食は、黙食とのお話をいただいたのですが、お話し好きの方とともに楽しい昼食になっていました。午後は、宗祖大師殿へ場所を移し、道場の中はろうそくの灯りだけで、

ふすまで仕切られておりました。その後、ふすまがとられた瞬間、さわやかな風が通り抜け、眼前に広がる伽藍と僧侶方のお姿に心が浄化されたようでした。三摩耶戒を教授大阿闍梨である管長殿下から授けていただきました。

その後、道場を移し本殿入口で頂(あたまた)に香水を注いでいただき入門し、目隠しをつけ前の方の背中に手を合わせて整列し、三摩耶戒の真言「さまやさたばん」を唱和し、サポートを受けながら道場の中心まで進み、敷曼荼羅に投華し、目隠しが外され大日如来の仏様と縁を結ばせていただき、眼の前に広がる仏様の世界を目にすることができました。また、僧侶の修行の一部を拝見することで、修行の厳しさがわかりました。高齢の母にも、住職から「家族も行くのでサポートできますよ」と温かいお言葉をいただきましたが、歩行の不安もあり参加することができませんでした。その後の夕勤行では先祖代々の霊位とともに、幼いころに亡くなった兄の回向をしていただき、心が晴れました。仏さまとご縁を結ぶことができ、心穏やかな日々を送れるよう努めていきたいです。



現在の大仰城跡と誕生寺遠景

一、誕生から修学まで

今から五百七十年ほど前、三重県津市一志町大仰おほのきに一人の男の子が誕生しました。母が地藏菩薩から宝珠をいただいた夢を見て授かったことから童名を「宝珠丸」と名づけられました。父小泉左近尉藤能は大仰城の城主でありましたが深く仏教に帰依されていきましたので、子どもには仏道を学び修行を積んでほしいと考えていました。

八回連載(その2)
『真盛上人一代記』
『御絵伝』と『和解伝』を中心に宗祖の行実を追体験

西願寺 長谷川 真徹



宝珠丸は七歳になると津市白山町川口の光明寺にあずけられました。光明寺の盛源律師に従って經典を習読されると、一を聞いて千を悟る器量であったと云います。修学を積み十四歳になった宝珠丸は長い髪を剃髪し真盛と

名づけられました。

父藤能は、真盛上人が十六歳の時にこの世を去りました。これを機に上人は仏道の志をより強くし住み慣れた光明寺を離れ、東海地区最大の学問所である密蔵院(現愛知県春日井市熊野町)に修学の場を移しました。苦学の末、三年間の修学を終え故郷に帰っても上人に頼れる人はいませんでした。しかし、伊勢神宮に詣で参籠すると、藤原村の兵衛太夫との出会いがあり、上人の志や人柄に共感して太夫が檀那となり修学の支援をしてくれることになりました。



ました。

上人は十九歳にして比叡山西塔南谷に登ることができ、慶秀和尚の室に入ることができました。そこでは昼夜を通して修学し、寝の間も惜しんで堂に籠り、極寒の冬も、真夏の一歩暑い時であっても、様々な經典を讀破し修行を積んだと云います。

二十五歳にして阿闍梨あじりの位に登られ、三十三歳にして法華大会の講師に抜擢され、探題慶秀和尚から円頓戒の法を受け継がれ、戒を厳しく保たれているその行実は一山を標榜する存在と成りました。後に居を比叡山西塔智智院に移し、叡山三院の名室を訪ね、宗門の口伝を余すところなく受け継がれました。二十数年におよぶ比叡山での修学の間、上人は一度も山を下りることはありませんでした。

(続く)



人形供養のご依頼受付中

人形供養法要

三月三日 午前十一時〜

平成七年（一九九五年）に起こった阪神大震災。被災された方より、ひな人形を供養していただけないかと相談があったのがきっかけとなり、他にも困っている方がおられるのではないかと始まった「ひな人形供養」。

子どもたちの成長を見守り続け、お役目を終えたお人形。大切にされ思い出の詰まったお人形は「災厄を子どもたちの代わりに受けてくれるヒトガタのお守り」ともいわれています。一緒



持ち込まれたお人形たち



昨年の法要の様子

に長い年月を共にしたお人形やぬいぐるみを処分するのは大変心苦しいものです。

西教寺では、ひな人形をはじめあらゆるお人形をお預かりして供養を行なっております。お預かりしたお人形を一定期間本堂にお飾りして、ご参詣の皆様にご覧いただいております。

三月三日十一時よりお人形やぬいぐるみに感謝を捧げ、抜魂供養の法要を武田圓籠猊下の御導師のもと、内局出仕により法要を行います。

檀信徒の皆さままで、お人形の供養をご希望される方は、西教寺までお問い合わせください。（〇七七―五七八―〇〇一三）

ひな人形展

二月十日〜三月十日

西教寺書院にて「ひな人形展」を開催しております。全国で唯一の皆さまから供養のために持ち込まれたお人形が構成されている展示となります。

過去に持ち寄せられた、ひな人形の中には大変古いものや地方独特なものなど大変貴重なお人形もたくさんあります。このまま役目を終え、誰にも見てもらえないのは忍びないということでひな人形の専門家の監修により江戸時代から幕末・明治・大正・昭和・平成の時代のひな人形約五〇〇体を展示しております。

どうか皆さま西教寺にご参詣ください。



ひな御膳のご案内

二月十日より三月五日の期間、「ひな御膳」（二二〇〇円）のご提供を行なっております。ご予約は西教寺売店受付まで。（電話〇七七―五七八―〇〇一三）



ひな御膳

檀信徒の皆さまへお願い

総本山西教寺にご参拝の際は、先にご配布させていただきました「檀信徒用無料拝観券（ご家族五名様まで）」を必ず受付へご提示ください。紛失された方は、本紙（寶珠）をお持ちいただきご提示いただきますよう、お願い申し上げます。

発行所 天台真盛宗教学部

大津市坂本五丁目十三一

総本山西教寺内

電話 大津（〇七七）五七八―〇〇一三番代

印刷所 宮川印刷株式会社

大津市富士見台三十八

電話（〇七七）五三三―二四一四番